

第二次大戦ばつ発時ヨーロッパを席卷したドイツ軍に対抗する英軍との乱打戦

発達した鉄道網を走る巨砲列車

大砲は移動が非常に面倒なものである。砲身と砲架（下部）に分解してそれぞれを数頭のウマで引かねばならないのだから……。ウマの代りに力の強い大型牽引車（トラクター）を用いても坂や悪路、トンネルや鉄橋などにさしかかったら進撃のスピードはグンとおちる。

ましてや大型の砲だったら移動には大変な労力が必要とする。だから第一次大戦中、ドイツ、フランス、英国は巨大な貨車に大型の大砲を乗せることを考えた。レールがあれば簡単に動けるからである。これが列車砲の利点だ。

ヨーロッパはアジア、アフリカと違って鉄道網が発達している。このことは列車砲の製造に拍車をかけずにはおかない。もちろん巨大な列車砲は自走するわけではない。SLが列車砲を引いてレールの上をゆっくりと走るのである。大型の列車砲は普通、装甲列車とはべつのものである。装甲列車は歩兵の乗った貨車が敵の機銃弾を受けても耐えられるよう装甲を張り、また小さい山砲など

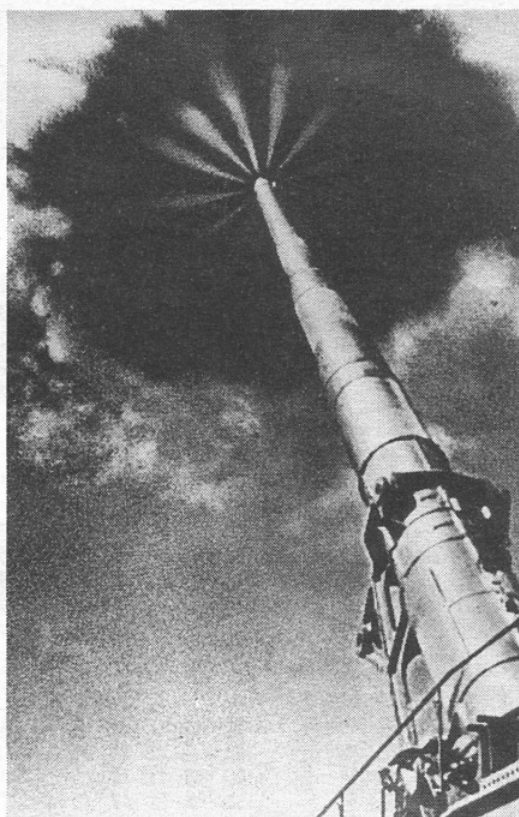
〈写真左ページ〉ドイツ軍の28cm K 5 列車砲が発射煙と炎を吹き出している状況がよくわかる。▶発射された瞬間の列車砲。英仏海峡越しに英国へ砲撃をくわえることもできるので大西洋城塞に集合した

■戦史研究家

木 保 滋 郎

ビー級砲戦

ヨーロッパ大陸はクモの糸のように鉄道が発展している。そこでドイツ、フランス、イギリスは貨車に巨大な大砲を乗せ、レール上を走らせることによって移動が簡単で大きな戦力と考えて列車砲を製造した。そしてついに英仏海峡の戦いとなった



を貨車に乗せる場合も多い。しかし、ここでいう列車砲は敵兵との戦闘はしない。非常な長距離から友軍の頭越しに敵陣・要塞や敵艦に巨砲弾のパンチを浴びせるのだ。だから射たれる敵兵はどこからこの大きな砲弾が飛来するのかまったくわからない。

第一次大戦の時、フランスのシュナイダー社やサン・シャモン社（共に戦車のメーカーとして知られている）は、列車砲を数台作った。三二センチの列車砲の砲弾のスピード（初速）は一秒間に八五八メートルと普通の榴弾砲の一・五倍にもなった。これら大小数種のフランスの列車砲は、第二次大戦まで残ったが、フランスがドイツに降伏した一九四〇年六月、ドイツ軍に捕獲され、ドイツ軍が以降、英仏海峡方面で使用した。

列車砲は他の砲と同じく砲身の仰角により射程を調節する。フランスが前大戦中、使ったサン・シャモン社の四〇センチ・カノン列車砲の場合、高射砲のように最大七三度までの仰角がかかる。

問題は左右への旋回である。巨大な列車砲は左右へはそれぞれ六度ずつしか動かない。だから射撃場にはレールを大きく円形に敷設し、これ



ドーバーで対決した英独へ

によって敵の方向に砲身を向けねばならない。あるいはSLの操車場のようにターン・テーブル（回転台）を設け、これを水圧や電気で旋回させる方法もある。

ドイツ陸軍はよくこの方式を採用したが、列車砲があまりにも巨大となるとターン・テーブルも巨大なものを作らねばならず費用がかかることおびたしい。列車砲は数分に一発しか射てぬきわめてスローモーな射撃となる。

独に対抗した仏英の列車砲開発

一九一四年にはじまった第一次大戦でドイツ軍は列車砲をよく利用した。有名なクルップ社がいろいろな口径の列車砲を作ったからである。戦艦の主砲を利用した三八センチ砲は砲弾の初速が一〇九〇メートル／秒という速いものであり砲弾の重さは七四四キロ、最大射程は四万六〇〇メートルにもたったした。

戦艦大和の四六センチ砲の射程四万三〇〇メートルより長いけれど砲弾一発の重さは半分近くも軽い。そのほか三五・五センチ砲や二八センチ、二四センチ、二一センチの列車砲も作った。二八センチ砲とい

うとはんばな感じがするが、ドイツ海軍は戦艦や巡洋戦艦の主砲として二八センチ砲を愛用していたから弾丸の製作などに好都合だからである。二八センチ、二四センチ列車砲は後にのべるよう第二次大戦でも使われた。

第一次大戦で両軍の列車砲は、フランス北東部の野戦で使われた。さきの三八センチ列車砲は戦争末期、米兵とオーストラリア兵がカンブレーやサン・カンチンの野原で攻勢にでた。この時、捕獲されぬようドイツ砲兵は自から巨砲を爆破して退却している。

フランス軍は開戦時、列車砲がなかった。

開戦四ヵ月目の一九一四年十一月、戦艦の三〇・五センチ砲を利用した列車砲をサン・シャモン社が作り始め、三四センチと四〇センチ列車砲も大急ぎで製作された。面白いのは四〇センチ砲であり、ドイツ軍に占領されたみずからのフォルド・ボー要塞の鉄道トンネルを射つのに使用されている。

一九一八年六月、西部戦線でドイツ軍が攻勢にでた時、三〇・五センチ

特集

巨砲陸戦記

チ列車砲は捕獲されてしまった。以降、フランス軍は二四センチ列車砲がレールのない場所まで退却する時、砲を乗せる台車とこれを引くトラクター（牽引車）をわざわざサン・シャモン社に作らせている。なおフランスの列車砲の技術は注目に価すると見た日本陸軍は、戦後の大正十四年、シュナイダー社より一台を購入した。これが九〇式二四センチ列車カノン砲であり満州（中国東北部）のロシアとの国境に配置された。

英国は大小二種だけの列車砲に甘んじた。

一つは二三・四センチ（九・二インチ）マーク13型列車砲である。これは第二次大戦でも有効に使用された（後述）、カノン砲ではなく太い榴弾砲である。初め海岸砲だった砲に車輪をつけて移動できるよう改めたのである。弾丸重量一三〇キロ、最大射程は三万メートルだ。砲身の長さは三五口径で列車砲の重さは八七・四トンもあった。もう一つは三〇センチ列車砲で驚くなれ一四二門も作られた。これはフレンチ卿の海外派遣軍に加わってドーバー海峡を渡り北東フランスに運ばれ二二万七〇〇発も射っている。

一門につき士官四名、兵士六七名

が必要だった。こうしてみると第一次大戦では両軍とも野戦で列車砲が非常によく活躍していることが、うかがわれる。

ダンケルクに遺棄された大砲

第二次大戦が一九三九年九月に始まった。

各国とも列車砲の価値は下ったと思った。

飛行機があまりにも発達したからだ。面倒な列車砲などなくても敵の後方補給地や要塞など飛行機で爆撃できるからである。

おまけに列車砲は敵の偵察機に見えたら動作が鈍いから、もう最後だ。あるいはレールを発見されただけでも爆撃され、すぐ線路の修理班を呼ばねばならない。しかし列車砲の側でも普段、砲はトンネルの中にかくしておき、レールは樹木などのカムフラージュで上空から見えぬようにするなど、いろいろな工夫がなされた。

ドイツは第一次大戦で負けたため、軍備を制限された。そのため第二次大戦では列車砲はゼロから出発しなければならなかった。クルップ社は第二次大戦のはじまるころ、二四、二八センチ列車砲を作り終戦ま

で二五門もが次々と軍に引き渡された。

カノン砲が多い。列車砲にはそれぞれ名前がつけられた。特に二八センチ砲は優秀な砲だった。都合のよいことにこれは戦艦シュペー級やシャルホルスト級の主砲の弾丸と同じだった。三〇・五センチ列車砲もある。これら長距離砲はフランスとの国境に沿ったジークフリート要塞の手前（後方）に配置された。

第二次大戦でも第一次大戦と同じく英軍はフランスを助けるため海軍派遣軍を編成した。ゴート卿の九コ師団であり、彼らはドーバー海峡を南に渡って一九三九年末、北フランスに到着した。この中には例の二三・四センチ（九・二インチ）列車砲二門も含まれていた。

ところがドイツ軍はマジノ線のない北方中立国オランダ、ベルギーを通過してフランス軍や英派遣軍の側方を攻めてきた。連合軍は総くずれとなってしまう。そしてフランスのダンケルクの浜辺へ退却する。この時、列車砲二門は放り出されドイツ軍に捕獲されてしまった。兵士だけは危うくボートやヨットに乗り英本土へ生命から逃げ帰る。一九四〇年五月、ダンケルクの浜辺にはおびただしい数の英、フラ

ンス軍の大砲やトラックが置き去りにされた。

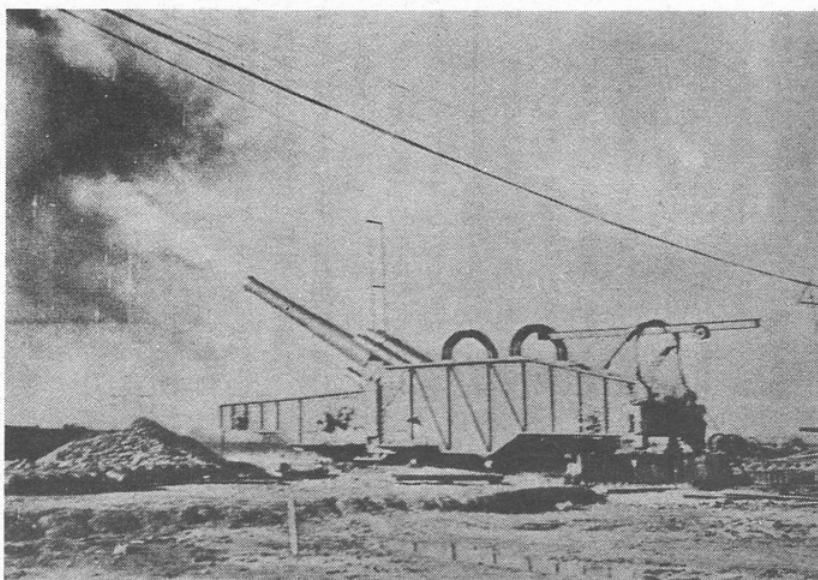
その中でも一番、大きいのは例の二門の列車砲だった。

フランスは一九四〇年六月、ついにドイツに降伏した。ドイツ軍はパリのシャンゼリゼの大通りで入城式をおこなう。フランスの虎の子、大小二〇門もの列車砲もドイツ軍に捕獲されてしまう。三〇・二・三七センチのこの二〇門はあまり使うチャンスのないうちにフランスは降伏してしまったのだ。

ドイツ軍の英本土上陸を阻止

英軍が本国へ逃げ帰りフランスがドイツの軍門に降るとヒトラー総統はいよいよ英本土上陸の準備を開始した。一九四〇年九月のことである。砲兵出身の陸軍総司令官フォン・ブラウヒッチュ元帥は「捕獲したものをふくめ列車砲はすべて英仏海峡に送れ！」と命令した。ダンケルク・カレー地区のドイツ第一六軍の管轄地区にはSLに引かれて大小の列車砲がノロノロとやってきた。それは一門で一コ中隊をなし弾薬車、工作車、無蓋貨車、クレールン車など数台で一セットとなっていた。

上陸作戦が始まったら海を越えて



火を吐く80センチ列車砲グスタフ

車砲二門があったが、それは戦艦クイン・エリザベス級や巡洋戦艦フツド（ドイツ戦艦ビスマルクにより撃沈さる）の主砲と同じマークⅠ型だ。それは弾丸重量八七九キロ、

最も大射程三万六〇〇メートル（仰角三〇度の時）で砲の重さは一〇一トン、砲弾のスピードは七四九メートルだった。また新戦艦プリンス・オブ・ウェールズ級の主砲と同じの三五・六センチ（一四インチ砲、重さ八〇トン）の型二門も追加された。駆逐艦くらいのドイツ艦隊撃退用には一五・二七センチや一〇センチ砲各二門ずつも用意された。

一九四〇年八月二十二日の朝、始めてドイツの列車砲が英仏海峡で火を吹いた。フランス領カレーの断崖の上にある六門の長距離砲が吠えたのである。すぐ英軍も三五・六センチ砲で反撃した。戦闘の原因はドイツの砲が英仏海峡を通る英小船団への砲撃を始めたためである。陸上交通で運べる量など知れたものだから英国、ドイツ共にドーバー海峡で小船団を用い物資を運んでいたのだ

英本土の南岸を射とうというのである。長さ五〇〇キロメートルもの英仏海峡のうち一番、狭いのはドーバー海峡付近だ。つまりフランスのカレー港と英国のドーバー港の間である。フェリーで一時間ほどの距離三八キロだ。昔、青森から北海道の函館まで青函連絡船で三時間半もかかったことを考えれば英国とフランス

は非常に近い。特にカレーに近いグリネ岬の先端からは英国は手がとどきそう。だからドイツの列車砲はグリネ岬に集まり海峡の対岸に狙いを定めた。カレーの港の付近にはドイツの上陸用舟艇がギッシリとならび英本土は今や時間の問題と考えられた。

英本土では正規の軍隊のほか国民義勇軍が編成され海岸（白い壁として有名だが）をパトロールしはじめた。一九一八年から英本土南岸には二門の二三・四センチ列車砲が林の中にかくされていた。ドーバー付近には三八センチ（一五インチ）列車砲二門があった

ドーバー海峡のドイツ列車砲（1940年9月）

部隊名	大砲の数	設置場所
ジークフリート大隊	37cm砲×4門	グリネ岬の南
フリードリヒ・アウグスト大隊	30.5cm砲×3	ブローニュの北
グロッサー・クルフェール大隊	38cm砲×4	グリネ岬
プリンツ・ハインリッヒ大隊	28cm砲×2	カレー～ブランネの間
オルデンブルク大隊	24cm砲×2	カレーの東
M1～4大隊	17cm砲×14門	グリネ岬とカレー港
合計	29門	

英ドーバーの対岸は北フランスのカレー。グリネ岬がもっとも英本土に近い。ドーバー海峡は幅38キロ。1門で1コ中隊をなす。

ドイツの長距離列車砲はドーバーの町にさえ砲弾を飛ばしてきた。第一次大戦時代と違い彼等の列車砲はドーバー海峡の南（ドイツ軍）と北（英軍）とでたがいに射ちあつたのである。しかし毎日、はげしい砲撃があつたわけではなく時々、思いだしたように砲声轟いたにすぎない。射手が車体から一〇メートルも離れたところからひもを引くと発射される。ドイツ兵士たちは両耳に指を突込み、鼓膜が破れぬようにつとめた。両軍ともにこれら長距離砲は敵の偵察機が飛来してもわからぬようまくカムフラージュされていた。一九四〇年九月中にはドイツ列車砲は六回も射ってきた。特に九月九日ははげしく一五〇発も射った。

ドイツの二八センチ砲でさへ一時間に一〇一五発しか射てない。だからあちこちの砲台から射たことになる。これは英国本土への上陸の前ぶれではないか。英軍の列車砲はセント・マーガレット湾の南部鉄道の各所に分散、配置された。六六歳の頑固おやじウイ

ンストン・チャーチル首相はドイツ軍の英本土上陸の対策が上手く抗じてあるか心配になった。彼は三日後、視察にやってきた。一九四〇年九月十二日、彼は列車でドーバー付近までやってきて二三・四センチ列車砲を見て安心した。

海軍軍令部総長、陸軍参謀総長、海軍大臣もチャーチル首相に同行した。

しかし英首脳部の心配は杞憂におわった。アドルフ・ヒトラーが英本土上陸「あしか作戦」を諦めたからだ。英本土空襲(バトル・オブ・ブリテン)でドイツ空軍は力を出しきってしまったからである。そのうえ陸用舟艇も不足している。海軍長官レーダー元帥も「この兵力で英本土上陸はとて無理」と決行に反対した。一九四〇年十月、ヒトラーは作戦の延期を発表したが、延期イコール中止となったのである。

英仏海峡の長距離砲戦

一九四〇年十月十一日、ドイツ列車砲は最初の戦果をあげた。英貨物船インバー(二五四三総トン)を損傷させたのだ。三八キロメートルも離れているのによく至近弾を与えたものである。以降、毎月一隻ずつの

戦果があった。

連絡船のターミナルとして知られるフォークストンの漁港にも巨弾が落下し、市民をあわてさせた。一年後ヒトラーはひそかにロシアへの奇襲を企図した。

このバルバロッサ作戦のためドーバー海峡の列車砲の一部に一九四一年五月「ロシア国境に向かえ！」の秘密命令が下る。SLに引かれてドイツ列車砲の半分はひそかに東部戦線にむかった。

フランスのブレスト湾に北大西洋の通商破壊から帰ったドイツ戦艦シヤルンホルスト、グナイゼナウ、重巡プリンツ・オイゲンの三隻の姿があった。

この三隻はドイツ海軍の主力だから英空軍は一九四一年、プリストル・ブレナム、ビッカース・ウエリントン双発爆撃機を英本土から何回も送って爆撃させた。

そのたびにドイツ戦艦は大なり小なり損傷する。このままではいつか全滅してしまう。レーダー元帥はこの三隻に対し、ドイツ本国に帰るよう命じた。

一年前、ノルウェーからでて英国の北方を迂回し北フランスに入ったドイツ艦隊である。だが今回、司令官チリアクス中将は奇想天外なコー

スをとった。

狭い英仏海峡を白昼堂々と突破しようというのである。五一歳で背が高く無愛想なチリアクス中将は戦艦部隊司令官に昇進。シヤルンホルストに乗って一九四二年二月十二日の未明、ブレストを出港した。

港外で見張っていた英潜水艦シーライオンは裏をかかれ出撃に気づかない。当時、英ドーバー地区海軍司令官ラムゼイ中将は丘の上の白いドーバー城の中に司令部を設けていた。

彼は第一二沿岸重砲隊に対しドイツ戦艦への射撃を命令した。だが惜しくもサウス・フォアランドにある二三・四センチ(九・二インチ)砲四門しか使えない。この四門は第一次大戦の生き残りの旧式砲だ。

三八センチ砲の砲台はまだ完成していないし二門の三五・六センチ砲(一四インチ)砲は射撃管制のシステムとはつながっていないのだ。朝だというのに霧が深く、砲をレーダーと直結させなくては狙いが定まらない。ドイツ艦隊は射程の中に入っているはずなのに……。

「配置につけ！」のブザーが鳴って二三・四センチ砲の砲員は廊下を走った。二月十二日の正午だった。目標は目には見えない。だが波長の短

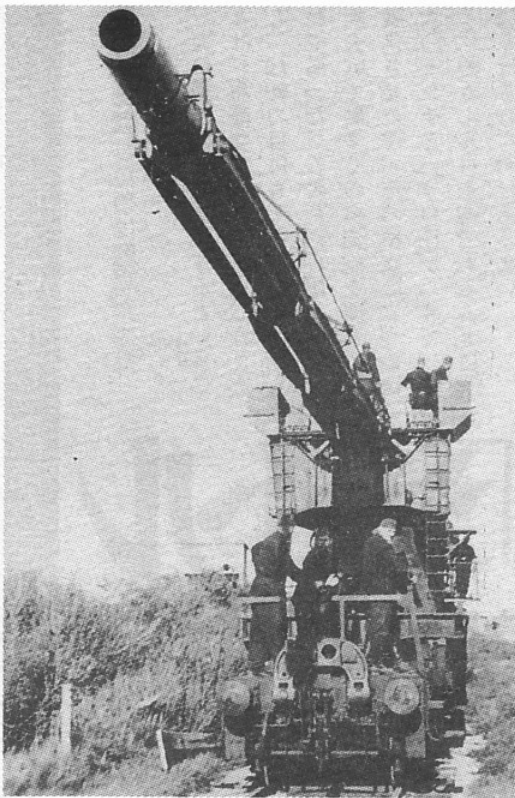
かいK型レーダーで二万九〇〇メートルの彼方にあることがわかる。射程のギリギリの地点だ。

「射ち方、始めッ」の号令がかかった。英列車砲が始めてドイツ戦艦を射つのだ。発射後、五十五秒たなないと弾丸はとどかない。前から三番目を走っていった重巡プリンツ・オイゲンの後方に水柱があがる。レーダーで見ているとドイツ艦隊は突如、ジグザグをとり始めた。英軍の弾着に気づき命中弾を避けようとしているのだ。

英軍はドイツ艦隊の速力を二ノットと見積ったが、実際には三〇ノットもの高速で飛ばしていたのである。アツという間にドイツ艦隊は走り去った。

戦艦の左舷にいたドイツ魚雷艇は煙幕を張って敵砲台から姿が見えぬようにした。三万一〇〇〇メートルも離れてしまったから、もう無理だ。十二時三十六分、「射ち方やめ」の号令が英砲台にかかる。十七分間に二三発を射ち、そのうち三発が至近弾となった。

「味方の戦艦が射たれている。掩護してやれ」グリネ岬のドイツ長距離砲にも応戦するよう命令がでた。目標は例のサウス・フォアランドの英二三・四センチ(九・二インチ)砲



ドイツ軍の21センチK12列車砲

台である。弾着は遠すぎた。数発の弾丸はセント・マーガレット湾の背後の畑に落下した。砲台の二〇〇メートル後方に泥土の煙が上がる。

数分後の十二時三十五分にも数発が落下した。さつきよりよほど近いが、英砲台には何の被害もない。今回もいたずらに畑の土をハネ上げただけだった。

十二時五十分と五十二分にも落下した。たがいにノー・ヒットの長距離砲撃戦だった。英砲兵はドイツ戦艦をとり逃したことを、くやしがつた。二月十二日の砲撃戦は長距離砲がいかに当たらないかの教訓を示したのである。

二月十三日、ドイツ艦隊は本国に

到着した。だがドーバー海峡をすぎたころ、英軍の機雷にふれて二戦艦は損傷していた。

英軍魚雷艇を撃沈した長距離砲

ドーバー海峡の彼我の巨砲は第一次大戦のように陸上戦に協力し、その威力を発揮することはなかった。しかし、狭い海峡を通過せんとする敵船に対しては火を吐いた。その時、敵砲台にたいしても列車砲や長距離の沿岸砲が牽制球を送ったことはいうまでもない。

ドイツの仮装巡洋艦は三回、ドーバー海峡を突破した。第一回はミシエル(二万一〇〇〇排水トン)であ

り、一九四二年三月十四日の未明だった。同艦は一カ月前の戦艦と違い方向が逆である。つまりバルチック海から大西洋へ英商船狩りに出ようと海峡を西南方に突破した。英魚雷艇六隻がミシエルを攻撃してくる。ドイツ砲台は敵の頭上に照明弾を射ち上げ敵の姿をあかあかと照らした。

二度目は二カ月後の仮装巡洋艦ステリア(一〇〇〇排水トン)であり、一九四二年五月十三日、大西洋へ出ようとする。またもや英魚雷艇が来襲、彼我の長距離砲も加わった。この時、ドイツの砲は英魚雷艇二二〇号を撃沈した。長距離砲が敵艦を沈めたためらしい例である。

一年後の一九四三年二月八日、ドイツ仮装巡洋艦コロネル(二万二七〇〇排水トン)も大西洋に出るため、ドーバー海峡を突破した。ドーバーの英国の三八センチ砲が射撃を開始する。

着弾までに二五秒かかると知ったコロネルは双眼鏡で彼方にピカピカと発砲の閃光を認めるや、すぐ大きく転舵してつぎの命中弾を避けた。だから四〇分間も射たれたけれど一発の命中弾もなかった。

一カ月後の一九四三年三月六日、今度はドイツの列車砲が火を吐い

た。目標は小規模な英船団である。この戦いで英貨物船コルンダム(九二九総トン)がドーバー港内で損傷した。

ドイツB軍集団長ロンメル元帥は一九四四年、近くノルマンディー上陸があると直感した。彼は二一センチ列車砲を送らせ海岸の防備を固める。五月九日の夜、ハンドレペーリ・ハリファックス、アプロ・ランカスター、デ・ハビランド・モスキートなど英爆撃機四一四機がカレー地区の七カ所の砲台を爆撃した。上陸二日前の六月四日夜は四カ所だった。

これによりもうドイツの沿岸砲台は全部、破壊したと英空軍は報告する。だがドイツ砲台は生きていた。

ノルマンディー上陸より一八日後の六月二十四日、それは英南岸フォークストン港を砲撃し英貨物船ガーデン・ゲート(二七九一総トン)を大破させた。四日後には小型タンカーのダググラス(八二五総トン)をドーバー港の南西で損傷させた。

だがこれはドイツの巨砲があげた最後の戦果だった。上陸した英モンゴメリー元帥の第二軍集団はつぎつぎと北フランスの都市を占領したからだ。ドイツ砲兵は自から砲を爆破して退却したのである。